

○村上茂樹 (順天堂大学スポーツ健康科学部・むらかみ眼科クリニック)、白石安男 (東京理科大学経営学部)、河村剛光 (順天堂大学スポーツ健康科学部)、青木和浩 (順天堂大学スポーツ健康科学部)、大戸一 藤田恵理 (東京大学大学院情報理工学研究科)、濱野礼奈 (千葉県立松戸向陽高校)

《背景及び方法》良質な視力は競技能力の向上に不可欠である。しかし、視力矯正法が近年著しい進歩をとげながら、それを有効に活用して競技能力の向上に繋げる研究はまだ非常に少ない。そこで、今回演者らは、スポーツ選手の視力矯正方法の現状と傾向を知る目的で、体育系大学生スポーツ選手を対象にアンケート調査を行った。《結果及び結論》視力矯正をしている選手は全体の59.9%であり、競技中の視力矯正法(複数回答可)は、眼鏡(GL)39.8%、ハードコンタクト(HCL)1.1%、ソフトコンタクト(SCL) 46.6%、使い捨てコンタクト(DCL)70.3%であった。さらに、競技での視力の重要性について52.4%もが重要であると考えているにも関わらず、視力矯正法に不具合を感じる割合(複数回答可)は、GLで26.0%、HCLで1.3%、SCLで40.1%、DSLでは61.0%も認められた。また、全体の7.5%にドライアイ症状が認められた。性別では男性に多く、競技種目では、バレーボールに多い傾向にあり、一方、サッカーと陸上競技及び野球に少ない傾向が認められた。

○河村剛光 (順天堂大学スポーツ健康科学部)、村上茂樹 (順天堂大学スポーツ健康科学部、むらかみ眼科クリニック)、青木和浩 (順天堂大学スポーツ健康科学部)、青野武志 (順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科博士前期課程)

これまで、機能カラーレンズ使用時の若年者の視機能への影響を明らかにしてきた。しかし、視機能は加齢による影響を受けるために、中年者においても、レンズの色が視機能にどのような影響を及ぼすか明らかにしていくことは興味深い研究課題である。視機能への影響を踏まえてレンズを選択・使用することは、生涯スポーツ実施や眼の障害予防の観点からも重要である。被験者は、平均年齢 57.9 ± 6.0 歳の男女20名であった。被験者は計5種類のレンズ(クリア、薄黄、濃黄、薄黒、濃黒色)をランダムな順序で使用し、各視機能の測定を行った。その結果、横方向動体視力や深視力にはレンズの色による有意差は認められなかった。眼と手の協応において、濃黒色レンズは、クリア(透明)・薄黄色レンズとそれぞれ有意差が認められた。特に、薄暮条件、薄暮+光源条件において、クリア・薄黄色は、濃黒色・濃黄色よりも有意に低コントラスト視力が高かった。アンケート調査においては、若年者での先行研究同様に、薄黒色レンズの評価が高かった。